

氏名	フカダ マリア 深田 麻里亜
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	博美第355号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉ヴィッラ・マダマのロτζャ装飾
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教授 (美術学部) 越川 倫明
(副査)	〃 〃 (〃) 田辺 幹之助
(〃)	〃 准教授 (〃) 佐藤 直樹
(〃)	立教大学 〃 加藤 磨珠枝

(論文内容の要旨)

ローマの北西、モンテ・マリオの丘に建つヴィッラ・マダマは、教皇レオ10世の命によってラファエッロが構想した古代風建築である。建設は1518年頃より開始され、1520年にラファエッロが、翌年にレオ10世が死去すると、その計画は枢機卿ジュリオ・デ・メディチ（1523年に教皇クレメンス7世として即位）をパトロンに、ラファエッロ工房出身の芸術家たちに引き継がれた。内部装飾は1520年頃から実施されたが、1527年の「ローマ劫掠」を機に建設が中断すると、計画は全体案からみれば部分のみ完了した状態のまま放棄される結果となった。

先行研究では、ラファエッロによる初期構想の復元など、建築史的観点からの考察が多く行われてきた。一方、実際に建設された建築内部の装飾に関しては、ブロッホ、ルフェーヴル、ナポレオーネによる記述から概要を把握することができるものの、それらは建築全体を扱った基礎研究における付随的な解説に留まっている。装飾にパトロンと関連するテーマ性を読み解く試みは、チェリ・ヴィアによる論考が唯一であるが、その考察は細部には及んでいない。こうした状況から、本論文ではヴィッラ内部のロτζャ装飾を主な考察対象に据え、その図像体系を明らかにすることを試みる。

I章「総論」では、建設の歴史的背景を確認するために、注文主であるメディチ家の政治状況と建設のクロノロジーを概観し、装飾に関する研究史をまとめる。メディチ家の迎賓館という機能を考慮してヴィッラ建設が企図されたのは、教皇庁において外交政策が重要な政治課題となっていた時期であった。未完の建築への高い関心と古代風装飾に対する総体的評価の一方、個別主題については建設当初から近年の美術史研究にいたるまで、ほとんど話題に上らなかったことを、研究史の俯瞰から読み取る。

II章からIV章では、ヴィッラの「庭園のロτζャ」を構成する3つの径間の装飾について論じる。II章では、中央径間のヴォールトに表された「四季」と「四大元素」を主要な考察の対象とする。これらはコスモロジカルな世界観を象徴的に表す図像であり、左右の径間に展開する装飾体系の基点に相応しい主題をなしている。

巡る季節の図像はとりわけ、メディチ家の君主たちが掲げた「回帰する黄金時代」というモットーにも関連していると考えられる。

III章では、南西側径間にあたる左廊が、教皇レオ10世の治世を讃える主題構成となっている点を論じる。ヴォールト中央の《ネプトゥヌス》は、クリストフォロ・ランディーノの『アエネーイス』解釈を反映した「善き君主」を象徴する「クオス・エゴ」の構図に従った表現であることを新たに指摘する。海神の周囲に配された4点の楕円形場面には、フィロストラトス『イマギネス』を題材に、ウェヌスとアモルたちが治める王国が表されており、これらは《ネプトゥヌス》と対応する、君主のもとに平和に

統治された世界の表象と捉えることができる。ここには、レオが教皇位に就いて以来掲げていた「平和をもたらす者」という自己イメージと共通する特徴を見出すことができるだろう。

IV章では、北東側径間にあたる右廊の装飾が、レオの後継者としてメディチ家当主の座に就いた枢機卿ジュリオ・デ・メディチの美德を称揚する図像を形成していることを明らかにする。ヴォールト外縁に描かれた、ジュリオの水晶球の標章「CANDIDA TVTAVIDES 危険を免れた白きものを汝は見る」と的確に呼応するプログラムがここには展開していると考えられる。南東側エクセドラにはストウッコ浮彫連作《ポリュフェモスとガラテア、アキスの物語》、北東側リュネットには《眠るポリュフェモス》、ヴォールト頂点には《ガラテア》が表されている。各主題はジョヴァンニ・ボンシニョーリ訳『変身物語』（1497年）に付された寓意解釈に基づき、「淫欲」を暗示するポリュフェモスを低次の存在として、彼から逃れる無垢な「貞潔」を象徴するガラテアが至高の位置を占めるという、対比構造を意図した図像上のアンサンブルをなしていると読み解くことができる。

V章では、庭園に設置された《象の泉》を考察の対象とする。現在失われた装飾の再構成を試みた上で、象の彫刻、壁面に本来表されていた亀やイルカといった動物図像が、教皇クレメンス7世の君主としての自己表象と関連する可能性を論じる。象は「君主」の寓意とみなしうることを、当時のヒエログリフ解釈を代表するピエリオ・ヴァレリアーノの著作『ヒエログリフィカ』（1556年）の記述から明示し、また他の水生動物についても同様の文脈での解釈が可能であることを、『ポリフィロの夢』（1499年）との比較を通じて指摘する。『ポリフィロの夢』では、泉の装飾に用いられた動物が寓意的連想関係のもとに次々と登場するくだりがあるため、そのテキスト内容が装飾の直接的な着想源となったとも推測できる。

以上の考察を通じて、これまでの研究で指摘されたことのない装飾プログラムの詳細が明らかとなるだろう。ここには、施主である教皇レオ10世と枢機卿ジュリオ・デ・メディチの治世と美德を称揚するための図像体系が展開しているのである。その図像は、構図の上ではローマに保存された古代装飾や、ラファエッロの作品を参照しつつ、フィレンツェで培われた人文主義的古典解釈を足掛かりに実施されたことが明瞭となった。ラファエッロの死から「ローマ劫掠」が勃発するまでの限定的期間に制作された、異教主題を大々的に用いた装飾の詳細な様相を提示したことは、本論文の新知見と言える。ヴィッラの図像は、前後して実施されたメディチ家の一連の装飾事業とも関連しており、劫掠後にイタリア内外の宮廷で展開した芸術へ継承される典型的な図像レパートリーをなしていると考えられる。そのため、これまで看過されてきた装飾の重要性と位置づけに関する再考をも促すことになるだろう。

ヴィッラ建設の中断が決定的となった劫掠によって、クレメンス7世治世下のローマでは、文化的発展もまた断絶を余儀なくされることになる。ヴィッラの装飾は、はからずもローマにおけるメディチ家の権威と芸術パトロネージによる「黄金時代」の最後の証言となったのである。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、16世紀初頭にローマで建設されたメディチ家の郊外型別荘ヴィッラ・マダマの内部装飾を研究対象としたものである。同建築は、ラファエッロの設計により開始されたが、野心的な全体計画のうちごく一部だけが実際に建造され、1520～25年頃に元ラファエッロ工房に属した芸術家たち（ジュリオ・ロマーノ、ジョヴァンニ・ダ・ウーディネ、ジャンフランチェスコ・ペンニら）を中心に、ストウッコと壁画で装飾を施された。過去の研究史においては建築史的考察が主流であり、内部の装飾、とりわけその図像プログラムに関する考察は非常に手薄であった。本論文は主として「庭園のロτζジャ」と呼ばれる3つの径間から成る建築部分につき、多数の装飾モチーフを詳細に検討し、各径間の装飾主題がもつ意味構造を丹念に読み解いた労作といえる。結論を端的に要約すれば、中央径間はコスモロジカルな図像体系にメディチ家を称揚する暗喩的モチーフを重ね合わせたものであり、左廊（南西側径

間)は教皇レオ10世(ジョヴァンニ・デ・メディチ)の統治の理想化された表象を、右廊(北東側径間)は枢機卿ジュリオ・デ・メディチの個人的インプレーザに呼応した「純潔と不可侵性」の表象をなすものだとされる。

論文の第一章は、ヴィッラ建設の経緯とクロノロジー、および当時のメディチ家をめぐる政治的状況を的確に要約するとともに、内部装飾に関する先行研究についてまとめ、本論文の研究史上の位置づけと問題設定を明確にしている。続く第二章では、中央径間のコスモロジカルな図像体系を先行研究を参照しつつ吟味し、そこにメディチ家ないしレオ10世を称揚する象徴的要素が巧みに織り込まれている様相を指摘している。

第三章では、左廊の装飾が分析される。筆者は、天井中央のストゥッコ浮彫《ネプトゥヌス》をウェルギリウス『アエネイス』に由来する「クオス・エゴ」の図像と解釈し、15世紀の人文主義者クリストファーロ・ランディーノの著作『カマルドリ論議』の記述およびレオナルド・ダ・ヴィンチの素描《ネプトゥヌス》を比較材料として、この浮彫が善き統治者としてのレオ10世の暗喩である点を明らかにしている。さらに、周囲に展開される諸図像が「平和のもとに繁栄するウェヌスとアモルの王国」の主題を形成していることから、「クオス・エゴ」の図像との意味上の密接な関連性を指摘し、この見解をレオ10世時代に制作されたタペストリーの図像や、のちのフィレンツェ公国時代にフィレンツェ政庁に描かれた寓意図像との比較を通じて根拠づける。このように、ロτζジャ左廊の図像を、メディチ家に関連した15世紀後期から16世紀中期にいたる象徴体系の系譜のなかに的確に位置づける見方は、説得力に富んだ新知見として評価できるものである。

第四章では、右廊の装飾が分析される。ここで解釈の軸となるのは、天井中央の海のニンフの像と、リュネット部分に描かれた《洞窟のポリュフェモス》、エクセドラ部分の半円天井に見られるストゥッコによる連作「ポリュフェモスとガラテア、アキスの物語」である。筆者はこれまで同定のあいまいだった中央のニンフ像をガラテアと特定し、この図像がリュネットおよびエクセドラの装飾主題と密接に呼応し合っている事実を指摘した。独創的な論旨といえるのは、第一に、これまでの研究者から看過されてきたルーヴル美術館所蔵の作者不詳の素描を《洞窟のポリュフェモス》の準備素描の模写と位置づけることで詳細な図像分析を可能にした点、第二に、オウィディウス『変身物語』の同時代の版本に添えられた寓意解釈テキストを論拠として、ガラテアとポリュフェモスの関係性を、ジュリオ・デ・メディチのインプレーザである「無垢の白」の概念と結びつけた点である。その結果、右廊の径間全体の装飾が相互に関連し合いながら明確な意味構造を形成している事実が明らかになった。

第五章では、「庭園のロτζジャ」を離れ、屋外の庭園に設置された《象の泉》が分析される。この装飾の図像分析においては、ロτζジャ右廊の図像と密接に関係する「無垢の白」のインプレーザが解釈の鍵をなし、象の伝統的な象徴性である「善き統治者」のイメージと結びつけられている。この泉はこれまで特に象徴的レベルでの解釈を与えられておらず、筆者の知見は建築内部の図像体系と整合した、新しい読解として有効性をもっている。

以上のように、本論文はヴィッラ・マダマの装飾図像を体系的に読み解いた意欲的な論考であり、多くの説得的な新知見を含んでいる。この装飾の図像プログラムをこれほど踏み込んで読み解いた研究は国際的にも過去に例がなく、この点に本論文の最大の意義が認められるであろう。右廊の楕円形メダイオン画のプログラム上の位置づけ、アトリウム部分のストゥッコ装飾の位置づけなど、本論文で論じきれなかった問題もないわけではなく、これらの点に関しては、今後さらに考察を進めることが望まれるだろう。しかしながら、ロτζジャを中心に展開される装飾について15世紀以来のメディチ家の象徴体系に照らして解釈を深め、その後のマニエリスム時代の多様な装飾事例への展開を展望した論旨は、イタリア・ルネサンス美術研究に新たな知見をもたらした成果として高く評価することができる。